
力持つ夢

希和 近江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

力持つ夢

【Nコード】

N1397C

【作者名】

希和 近江

【あらすじ】

光と闇、希望と絶望、成功と失敗……。この世にはどんな物にも表と裏が存在する。それは、この世界その物にも存在する。しかし、裏には更なる闇がある事に殆どの者が気付く事はない。5年前、ある事件をきっかけに姿を消していた兄弟が、時を同じくして表、裏、闇の、全ての世界に戻ってきた時、舞台の続きが幕を開ける。

プロローグ（前書き）

執筆初心者の文章なので至らぬ所が多いと思いますが、最後までお付き合ひ頂ければ幸いです。

プロローグ

この世には、何の変哲もない表の世界を、生まれてから死ぬまで続ける者もいれば、表の世界で生きる者には誰にも知られずに裏の世界のみに生きる者、非日常を求めて一日ごとに、一分一秒ごとに裏の世界に踏み込んでいく者、表と裏の両側に違う顔を持つ者など、様々な人間がいる。

裏の中には政府さえ黙認し、裏の世界の住人だけでなく彼らを束ねる中心人物でも敬遠、畏怖する更なる闇の世界がある。その世界は人死など日常茶飯事、不可思議な力もあつて当たり前という世界。裏の世界の話は都市伝説や噂、ネット情報となつて表の世界へと広がっていく。当然、裏の世界にも都市伝説や噂はあり、時たま『禁忌』とされる話が流れる。

『禁忌』とされた話を含め裏で流れる話は、誰が流し始めたのか話の信憑性からして全く分からない。しかし、『禁忌』の話で分かっていることがいくつかある。

- 一、全て実際にあつたことである
- 二、殆ど話が裏世界よりも奥の闇世界の者が関わつた話である
- 三、話に出て来た不可思議な力は実在する
- 四、当事者の内最低1人にでも許しを得ていないと、その話について何か行動をとつた者は、翌日には還らぬ人となる

これらの事、特に四つ目の事実により、力を持たない者は無闇に『禁忌』の話をしてはならないという事が裏世界での暗黙のルールとなつているが、許しを得た者や当事者によつて話は確実に深く周囲に広まつていった。その話の中に、伝説とまで言われ人々に畏怖の念を抱かれている、ある能力者の兄弟の話があつた。

その兄弟が、『禁忌』の話となった事件をきっかけに消息を絶つて五年が経った日。二人は再び表舞台へ戻ってきた。

入り口の木製の扉に『夢占』と書かれているだけで、他に看板の様な物も出していない小さな占い屋。

- カラン、カラン… -

その占い屋の店内で、来客をしらせるベルが静かに辺りの空気を震わせる。

時刻は、まだ昼前。天気は雲一つない快晴で、窓は店の奥以外の三方向にあるのに、店内は夜中のような暗闇と静寂に包まれていた。その様子に入口で二の足を踏んでいた女性客に何処からともなく声が掛けられた。

『…おや、お客様とは珍しい。どうぞ、そのまま奥へお進み下さい。』

若い、まだ二十歳前にも思える青年の声。耳に心地良く響き、客は操られているかの様に一步步奥へと進んで行く。その足元を誘導するかの様に蝋燭の火が順に灯り、それにそって客は店の中心に近づく。その間も、姿の見えない者の声は変わらず聞こえ続けた。『さて、お客様のお名前をお聞きしても？ああ、どのようなご依頼だとしても、本名でなくても構いません。』

「柊乃院しゅうのいん 泉歌せんかと申します。偽名ではなく、本名です。」

女性、泉歌は夢の中にいるような気持ち良さから、何も考えずに本名を名乗ってしまった。それが当然と言った感じで、何処からともなく青年が微笑した気配が辺りに響く。そのままの状態で泉歌が

店の中心に辿り着いた時、彼女の足元を照らしていた明かりが全て消えてしまった。それを合図に彼女の精神は現実^{現実}に立ち戻り、今までは打って変わってこの店に充満する異常な気配と、まだ見ぬ話し相手に対する畏怖が少しずつ大きくなって行く。

手の届く範囲までしか見えなくなってしまった闇の中、泉歌は恐る恐る青年に尋ねる。

「あ、あの、貴方様は……」

『これは失礼しました。私は、夢に去る水と書いて、夢 去水^{こすい}と申します。去水とお呼び下さい。以後御見知りおきを。』

自己紹介と共に、相手が一礼する気配が伝わってきた。

「……去水様……あの、失礼ながら、姿を見せて頂けませんか？」

『これは可笑しな事を仰る。私は先程からずっと……』

ここまで淀みなく届いていた声が一度途切れ、一呼吸の間の後に泉歌の背後に灯^{あか}りが灯り、居場所を明確にした青年の声が彼女に向かつて掛けられた。誰もいない、何も無かった筈の彼女の背後から。

「……此処に居ましたよ？ 柊乃院様。」

驚いて後ろを振り返ると、そこには七本の蠟燭が立てられた燭台を持つ、二十歳ぐらいの黒髪黒目の青年が立っていた。

「さあ、お座り下さい。」

青年に勧められるままに、いつの間にか彼らの間に出現したいすに彼女は恐る恐る座った。それに続いて去水も燭台を机の上に置いて、彼女と相對するように座る。

「まず、ご用件を伺いましょうか？」

「……あ、あの、蒼い海の欠片を、見せて頂きたいのです。」

泉歌の言葉に、去水は目を少し細めて背筋を伸ばした。ただそれだけの動作なのに、彼女は周囲の温度が少し下がり、目の前に火の灯った燭台が有るにも拘らず、ただでさえ時間にしては暗すぎる店内が更に暗くなったように感じた。

「そう、ですか。そちらのお客様は久しぶりです。内容をお聞きます前に、一つ確認させて頂きます。この店の事とその言葉、『青い

海の欠片を見せてほしい』は誰からお聞きになられたのですか？」

この店と言葉について教えてくれた人物は表の世界のある方面で有名な人物で、泉歌だけでなく彼女の一族とは公的には接点があるとはならない立場の者なので、彼女は言っている物か迷っていると言いきりどんでいたが、ふと顔を上げた時に向かいに座っている去水と目が合ってしまった。静かな水面の様な眼に気持ち引き込まれる感じがする。視線を外さなければならぬと頭の隅で思ったが、どうしても外す事が出来ずそのまま自分の名を名乗った時と同じように、夢見心地のまま聞かれている人物の名前を口にしてしまう。

告げられた名を聞いて去水は遠い記憶を手繰るように目を細めるが、すぐにある人物が思い浮かび唇を少しだけ歪めた。その光景も、泉歌は現実から一歩離れた感覚で見続けた。

「なるほど、彼に聞かれましたか。彼とは昔ちよつとしか関わりを持っただけだったので、覚えて頂いているとは思いませんでした。そうですね、彼からの紹介なら格安で受けさせて頂きますよ。」

ここで去水が再び姿勢を正すと、やっと泉歌の意識も現実へと戻ってきた。彼女は店に入ってから幾度となく陥る不思議な感覚も合わせて、だんだんと目の前の青年に畏怖の様な物を感じ始めた。

「では、依頼内容をお聞きしましょう。御安心下さい、こう言う商売は信用が第一ですので、お話頂いた内容は私以外の誰にも漏らしません。その代わりと言っては何ですが、仕事をしやすいように出来るだけ詳しくお話頂けますか？」

畏怖感は拭えないままだが依頼内容について頼れる心当たりはここ以外にない為、泉歌は3回ほど呼吸を数える間に心を落ち着かせ、今回この店に来た理由をゆくりと話し始めた。

とつとつと語る彼女は俯いて話をしていたため全く気付かなかったが、話が進むにつれ去水の表情が少しずつ歪いびつにゆがんでいく。今回の依頼の本題に入った時には、見る人が見たらひどく不気味な、しかしどこか人を魅了する力を持った、誰かの優位に立った時のような喜びに満たされた表情になっていた。もしここで、彼女が顔を上

げて今の彼の表情を見ていたら、話は続けずに可能ならば店を出て行っていただろう。しかし、彼女は一度も顔を上げようとはせず、淡々と最後まで何もかも話してしまったため、数日後とても後悔する事になった。

そして、全てを話し終わってしばらくしてから彼女が顔を上げた時、彼の表情は何事も無かったかのように、会った時の穏やかなものに戻っており、声も穏やかにして一言だけ言った。

「そのご依頼、責任を持って請け賜りましょう。」

第1章 初見

少女は闇の中に立っていた。自身の体の細部まで見て取れるのだから、正確には全くの闇ではないのかもしれない。そんな理由^{わけ}の分からない状態にありながら、十歳という年齢に似合わず少女はとても冷静であった。

・・・・・・いつもの夢、か・・・・・・

ここ数年間、彼女は時々同じような夢を見ていた。だから、この後この夢がどうなるのか、途中までは知っている。

先生が言われたように、何か手がかりになるような物を見つけれたら良いのだけれど。

しかし、少女の希望とは裏腹に、いつもの夢はいつもの夢のように進んでいき、何一つ変わった所や手がかりの様な物は見つからない。

いつものように、神話に出てくる『天地創造』の場面が、高スピートで進んでいく。そして、夢の中の時はどんどん進み、二十一世紀に入った所で『何か』を見て終わってしまう。その『何か』は、他愛の無い誰かの日常である事がほとんどだが、たまに誰かの死、事故などを視る。時間としてはどれも近い未来の話なのだが、その誰かは自分の知らない人だったし、現実にいるのかも分からなかった。この夢を初めて見た五年前の一度だけを除いて何も気にしなかった。亡くなった両親も気にすると言っていたので、気にしないようにしてきた。それがいつものことだったが、今日は違った。夢に出てきたのは自分の一番好きな、両親が亡くなった直後から様々な理由で新しい主治医として同じ敷地内に住み込んでもらって

る男の人。今回の夢は、自分の好きな人が出てきたのだから、普通なら嬉しく思う物なのかもしれない。しかし、妙な胸騒ぎを覚えこの先を見たくないと思ったが、少女の思いを無視して夢はそのまま続く。

夢の中で自分は宙に浮き、人の目に映らないことは今までに見た夢で実証済みだった。だから、そんな事があるはずはないのに、主治医は自分の方に振り向き、いつもとは違う色の瞳で「大丈夫ですよ。」と言って微笑んだ。そしてその後、視界が白銀に包まれ、夢が終わるのが分かった。

夢現のままベッドの上で心ここにあらずの状態になっていた少女は、突然室内に響いたノックの音で現実世界に戻った。

「失礼します。おはようございます、鈴華様^{れいか}。先生がお越しになられたので、お知らせに参りました。」

「おはよう、梅陳^{めいちん}。少し寝過ぎしてしまったわ。すぐに着替えるから、先生には離れでお待ち下さい、と伝えてくれる？」

部屋に入ってきた女性の挨拶と報告に、鈴華と呼ばれた少女は笑顔で返し、次の指示を与えた。

「先生は既に離れにお通ししました。朝食もまだされていないとの事で、鈴華様とご一緒されるそうです。」

その言葉に少女は花の様に、可愛らしく笑った。

「ありがとう。先生には感謝しなくちゃ。あなたは本当に手際が良くて助かるし、あなたを連れて来て下さってから、毎日が今まで以上に楽しくなったわ。先生の次に大好きよ。」

鈴華と呼ばれた少女は、艶やかな黒髪で日本人形のような雰囲気を持っているが、透けるような白い肌と目鼻立ちのはっきりした顔でフランス人形のような雰囲気も持ち合わせている。しかし、それぞれの雰囲気がお互いを邪魔することなく絶妙にあいまって、少女をさらに美しく、そして可愛らしく見せていた。

「今日は柊乃院^{しゅうのいん}の大叔母様が来られるから、叔母様の好きな和服にするわ。色は、そうねえ……」

「先日仕立てたばかりの、あの桜色の着物は如何でしょう？確かあれは、先生も柊乃院様もまだ見ていらつしやらない物です。」

「ええ、それが良いわ！ありがとう、梅陳。」

クローゼットから桜色の着物を出してきた梅陳は、そのまま「失礼します。」と言って手際よく鈴華の着替えを手伝う。最後に腰の辺りまである長い髪を、桜をモチーフにしたバレッタで軽く止めて終わった。次に、梅陳は着物を包んでいた紙とそれまで鈴華が着ていた服を片付けてから、鈴華をお姫様抱っこの要領で抱き上げた。

梅陳がこの部屋に来てから三十分。その間、鈴華は一度も足を動かす事は無く、瞼^{まぶた}を開く事は無かった。この事から分かるように、彼女は足を動かして自分で歩いたりする事は出来ず、目も見えない盲目なのは生まれつきだが、足が動かなくなっただのは五年前に巻き込まれた事故が原因だった。

「おはようございます、鈴華さん。」

母屋である洋風の建物から見て東側に位置する、離れでもある日本家屋へ続く釣^{つり}殿^{どの}で、梅陳に抱き上げられたままの鈴華は若い男に声をかけられた。

「おはようございます、煌^{こう}先生。」

進行方向に対して右方向にいる相手に、正確にそちらに顔を向けた彼女は挨拶を返した。

「お庭で何をされていたの？」

「迷い猫がいたので、ちよつと遊んでいました。」

「先生は、本当に猫が好きね。」

鈴華は少し呆れたような笑みを向け、先生と呼ばれた男は今会った猫はどんな色をしていて、どんなところを気に入ったなどを語り出した。そのまま庭先での講釈が長引きそうだと見て取り、さり気無く梅陳が話の腰を折って、朝食が用意されている和室へと誘導す

る。その行動で我に帰った男は恥ずかしそうに笑って謝罪し、そのまま世間話を鈴華と続けながら移動した。

ここでちよつと人物紹介を。

盲目の少女、鈴華。本名を織乃院しきのいん。鈴華と言い、五代ほど前まで天皇家とも関わりを持っていた旧家のお嬢様。織乃院家には、桜乃院おうのいん、蓮乃院れんのいん、菊乃院きくのいん、柊乃院しゅうのいんの四つの分家があるが、何代か前からの決まり事で一族の頂点に立つのは、分家に嫁いだ者を除く本家直系のみとなっている。鈴華は現在十歳だが、両親共に五年前に事故で他界し、肉親は分家の親戚だけとなってしまうため、本家直系である彼女は一族の頂点に立つ者となってしまった。彼女が一族の頂点に立つ事になった時、さまざまな理由から分家のほとんどが反対をしたが、分家内で一番の決定権を持つ彼女の大叔母にあたる柊乃院当主と、祖父である先々代当主の遺言により、反対していた分家の者は何も言えなくなった。それでもしばらくは不満を言う者もいたが、本家に何代も仕えている使用人達の直訴によりある程度は引っ込み、残った少数もある男が後見人として名乗り出てからは、何故か何も言わなくなった。

その後見人と言うのが、煌先生。本名を霧銘きりな。煌と言い、現在は敷地内にある離れに住み込んでいる。五年前、鈴華が歩けない原因となった事故から数日後、彼女の両親の知人だと言って現れ、今では彼女の主治医となっている。分家の人間が不信に思い調べた事によれば、医学界では東洋、西洋の両方の医学に精通する異端児と言われる一方、脳外科など困難と言われる手術を難なくこなしてしまうため、神の手を持つ天才児とも言われているとか。ただ、どれだけ調べても、出身地や生年月日、詳しい経歴などが全く出てこない。調べて分かった事は、医学界での噂と、彼が開業医として医院を持っているにもかかわらず、収入はほとんど副業でやっている古本屋だが、その古本屋だけでなく医院の所在地さえ不明という、全くもって不信極まりない情報ばかりであった。彼について信じられるの

は、日本顔でありながら銀髪黒眼という外見と、霧銘 煌と言う名前、そして無類の猫好きと言う事くらいだ。

その猫好きの煌が連れてきたのが、鈴華の世話係兼家庭教師などの梅陳。煌が離れに住み込むようになってすぐ、何百坪の広大な土地に建てられた大きな屋敷に、十名に満たない使用人、それもそれなりに年のいった者ばかりでは、歩けなくなつた鈴華の世話も大変だろうと、看護師をしていたと言う彼女を連れてきたのだ。いつも黒いパンツスーツをきっちり着こなし、誰も寄せ付けない雰囲気を出しているため、初めて屋敷に來た時使用人達は不安を覚えたが、雰囲気とは裏腹に人当たりが良く、細かい事に気が利く割に、料理は苦手と言う意外な一面を見せられたりする内にすっかり馴染んでしまった。何より、一年ほど前に鈴華が身代金目当てで誘拐されそうになつた事があつたのだが、梅陳がプロ級の格闘技の腕を披露してくれたおかげで事なきに終えたため、使用人達は彼女を命の恩人と思い、鈴華の事については全てお任せしますと言う感じになつた。他にも、看護の事だけに留まらず、どの分野にも精通する知識を持っているため、今では鈴華の家庭教師までしている。

朝食を終えてからしばらくして、他愛のない会話が続けられていた座敷に、使用人頭によつて來客が告げられた。

「柊乃院様がお越しになられましたか、こちらにお通ししましょうか？」

「いいえ、本館の応接室にお通しして。」

鈴華の返答を受けて、使用人頭は客人を案内するために玄関へと戻つていく。それと共に、煌は席を立ち部屋を出ようとした。

「煌先生、どちらに？」

「柊乃院様がお越しになられたのなら、私はいないほうが良いですよ。」

苦笑する煌に、鈴華は不思議な顔をする。

「そんな事は無いと思いますけど。大叔母様は、いつも煌先生にお会いしたいと仰っているもの。」

「それは光栄ですが、それでも今回は遠慮させて頂きます。」

「あ、それでは今の内に。」

そう言つて、鈴華は今朝見た夢の内容を話した。その夢に自分が出てきたと聞いて、煌は驚いた顔をした。

「私が、あなたの夢に……。」

急に静かになった煌の様子に、鈴華はちょっとした不安を覚える。梅陳がいればということか分かるかもしれないが、朝食の途中で使用人の一人に呼ばれて中座したまま戻ってきていない。不意に、沈黙したままだった煌が、固い声で鈴華に聞いた。

「鈴華さん、その夢の中の私は、私の瞳は、何色でした？」

「えっと、紅、そう、宝石のガーネットのように赤い瞳をされていたわ。」

「……。」

「先生？」

その答えを聞くと、煌はまた黙り込んでしまった。鈴華がその空気に息苦しさを覚えかけた所で、一つの気配が近づいてきた。それに気付いた煌は、すぐにいつも通りに戻る。

「では、私は離れか温室の方へ行っているので、何かあれば呼んで下さい。……その桜色の着物と髪飾り、よくお似合いですよ。」

大好きな先生に着物の事をほめられて、さっきまでの不安は何処かへ行き、嬉しさで心は舞い上がる。そのため、梅陳と入れ違いで去って行った煌の呟きは聞こえていなかった。

「……その日は近い、と言うことかな。……今度こそ、命を落としても、僕はあなたを止めるよ、兄さん。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1397c/>

力持つ夢

2010年12月25日02時51分発行